

取り組みの原点を全教師で共有し 「欠落・段差・落差なき教育」へ

愛知県 阿久比町立英比小学校、阿久比町教育委員会

中学校で表面化する問題は、中学校だけの責任ではない。そうした認識の下、阿久比町の小学校4校と町内唯一の中学校は、互いのつながりを深めている。小中の教師同士、子ども同士の交流が増え、中学1年生での不登校が激減するという成果も表れてきた。

取り組みのポイント

- ◎阿久比町には小学校4校と中学校1校の計5校があり、町内の9割以上の子どもが同町立阿久比中学校に進学する。各小学校の児童数は約200~500人。阿久比中学校の生徒数は約750人
- ◎2005年度に町の独自施策として「幼保小中一貫教育プロジェクト」を立ち上げ、改善を重ねながら継続している
- ◎各学年で必要な学習内容を確実に身に付けさせる「欠落なき教育」、幼保小中の「段差なき教育」、学校間・学級間の「落差なき教育」を掲げ、教育長や校長らのリーダーシップの下、全ての教師が小中接続への意識を高めることを目指している

愛知県知多郡阿久比町

■知多半島の中央部に位置する人口約2万6,000人の自治体。「幼保小中一貫教育」を推進し、教師の力量向上と町を挙げて子どもを育てる「阿久比学園」の創造を目指す。

阿久比町教育委員会

所在地 〒470-2292
愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字殿越 50
TEL 0569-48-1111(代)

■事務局の指導主事1人で小学校4校、中学校1校を担当

S c h o o l D a t a

◎1909(明治42)年開校。校訓は「正しく・強く・おおらかに」。2011年度は「阿久比町幼保小中一貫教育プロジェクト」の事務局を務め、13年度の研究発表に向けて準備を進めている。



校長 石井勝巳先生

児童数 499人 学級数 18学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒470-2212 愛知県知多郡阿久比町大字卯坂字北大平7

TEL 0569-48-0022

URL <http://www.eibi-e.aichi-c.ed.jp/>

公開研究会 未定

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

◎背景

中学生になって表面化する問題を解決するために

阿久比町は、知多半島の中央部に位置する、豊かな自然が残る地域だ。古くから住む三世代の家庭も多いが、名古屋市内から電車で30分程度と交通の便が良いことから、近年は宅地開発が進んでいる。町に小学校は4校あり、私立中学校に進学する一部の子どもを除き、町内の小学校を卒業した子どもはほとんどが、町内唯一の阿久比中学校に進学する。

落ち着いた子どもが多い同校の地域でも、「中学校になって表面化する問題」があった。その1つは不登校だ。小学校では1校に1人いるかないかの不登校の子どもが、中学校では20人程度に上っていた。特に、中学1年生の2学期は不登校が増える時期であり、原因の1つに小学校と中学校での指導の隔たりが考えられたと、阿久比町立英比小学校の石井勝巳校長は話す。

「小学校の学級担任制では、授業でも学級活動でも同じ教師が子どもとかかわるため、子ども一人ひとりを把握して細やかに支援できます。しかし、教科担任制の中学校では教師との距離が離れ、指導の仕方も変わります」学習のつまずきも要因の1つに考えられた。小学校時代に学習内容や学習習慣が定着していないまま中学校に進学する子どもが、

残念ながら一定数見られたのだ。中学校では学習内容が難しくなることに加えて部活動が始まるため、学習習慣のない子どもはますます机から遠ざかり、授業に付いていけなくなりつまずいてしまう悪循環が生じていた。

このような課題を解決するために、阿久比町教育委員会（以下、町教委）は2005年度から「幼保小中一貫教育プロジェクト（以下、プロジェクト）」を進めてきた。町教委の瀧塚崇指導主事は、次のように説明する。

「小学校と中学校の両方のご経験がある、当時から教育長が『中学校で表面化する問題は中学校だけの責任ではなく、保育園、幼稚園、小学校、また家庭の責任でもある』と考えたのです。年齢に応じて身に付けるべきことを確実に身に付ける『欠落なき教育』、各学校段階で教える内容と発達段階とのずれがない『段差なき教育』、同じ学校段階間や学級間で差のない『落差なき教育』を目指す教育として掲げられました」

同じく、小中両方の指導経験のある石井校長も次のように話す。

「私は小学校と中学校を経験し、大きな違いを感じていました。小学5・6年生は小学校では修了に向かう時期ですが、同時に中学校への準備期間でもあります。阿久比町に赴任し、教育長の考えをうかがう中で、『中学校へのアプローチプログラム』が必要だと、より強く感じるようになりました」



阿久比町立英比小学校校長
石井勝巳 [Shigeo Ishii]

「教室は間違えところ。失敗を恐れず発言し、互いに学び支え合う学校をつくりたい」



阿久比町教育委員会
学校教育課指導主事
瀧塚 崇 [Takizuka Takashi]

「先生方とのコミュニケーションを大切にして一緒に学校をつくっていききたい」

◎取り組み内容

9年間の「重点指導事項」を作りつまずきへの手立てを考えたい

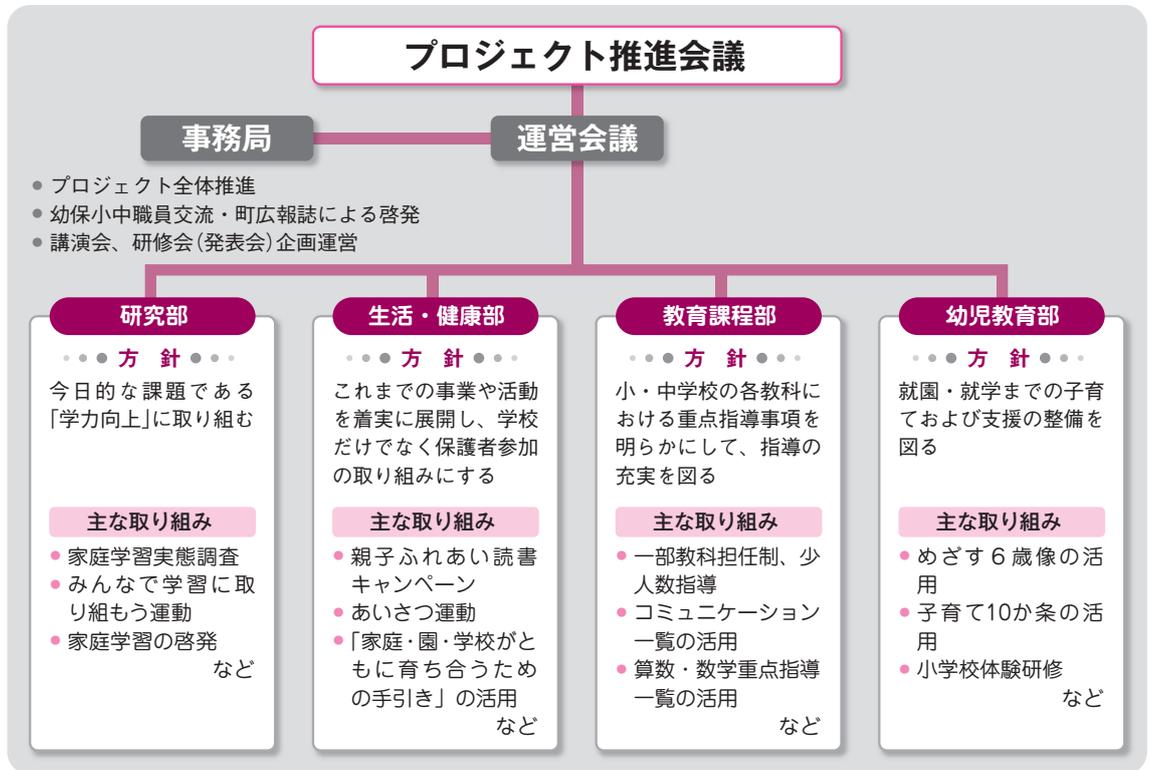
現在、プロジェクトは、町内の全ての学校・教師がかかわり、「研究」「生活・健康」「教育課程」「幼児教育」の4つの部会で進められている（P.12図1）。小・中学校全5校のうち、4校に4つの部会の担当を振り分け、残りの1校が事務局を担う。かつては5つの部会があり、事務局と部会を兼務する学校があったが、負担が大きくなり、現在の形となった。プロジェクトは7年目となるが、研究体制や研究内容は試行錯誤を繰り返してきた。代表的な施策を紹介する。

◎小学校での一部教科担任制

子どもが中学校で感じる戸惑いを減らすため、一部の教科で教科担任制を取り入れた。「担任が学級の子どもとかかわりを深める

図1

「幼保小中一貫教育プロジェクト」の組織と主な取り組み



*同校の資料を基に編集部で作成

ことはもちろん大切です。ただ、複数の視点で子どもを見ることはより深い児童理解にもつながります。一部教科担任制の導入は、小

を担わせざるを得ない場合があったことだ。「教頭や教務主任の先生が、専科として入る形が出来ればよいのですが、それぞれの業

中の接続を円滑にするだけではなく、子どもが学級担任以外の教師と人間関係を築ける利点もあります」

(滝塚指導主事)

英比小学校の場合、6年生は3学級だったため、3教科については、1人の教師が3学級の授業を受け持つという教科担任制を取り入れた。しかし、この方法には2つの問題があった。1つは、教科担任制のための時間割の組み替えに手間が掛かってしまうこと。もう1つは、教師3人の得意教科が分散するとは限らず、不得意な教科

務も多く、難しい面があります。教師の加配などの手立てがないと継続は困難だと感じています」(石井校長)

◎小中9年間の重点指導事項の作成

現在、注力しているのは、小中9年間にわたる「重点指導事項」の作成だ(図2)。

「小中9年間で最低限押さえるべき内容を、教科ごとに一覧表に出来たらと考えています。学習指導要領でも指導内容の系統性は示されていますが、各学年で身に付けるべき内容をより端的に一覧できる資料があればよいと考えました。今後は表の中でつまずきやすい事項に印を付け、小中の教師全員で共有し、つまずきを減らすための手立てを考えられるように活用できたらと思います」(石井校長)

国語と算数の「重点指導事項」に続き、ゆくゆくは他教科の一覧も作成する予定だ。

「特に中学校では、担当教科に関する取り組みの有無が先生方の関心を大きく左右します。子どもの学びをつなぐためにも、先生方の意識を高めるためにも、全教科分を作るのが大切だと考えています」(石井校長)

これまで、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)では、4つの小学校が実践する統一単元の設定を進めてきた。この取り組みが他教科へ広がるヒントになると考えている。

「総合学習の内容には各小学校の特色がありました。小学生として身に付けておくべき知識・技能を洗い出して統一すべき点を探

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

図2 算数・数学 重点指導事項（小学校の「数と計算」領域、中学校の「数と式」領域から抜粋）

小1	<ul style="list-style-type: none"> 10の分解と10の補数関係 (1桁の数)+(1桁の数)で、繰り上がりのある計算 (10何)-(1桁の数)で、繰り下がりのある計算 簡単な2位数・3位数の加減の計算 	中1	<ul style="list-style-type: none"> 正の数・負の数の加法、減法 正の数・負の数の乗法、除法 指数を含む計算 分配法則を使った計算 数量を文字で表す 文字式の表し方 式の値を求める 文字式の加法、減法 文字式と数の乗法、除法 解が整数で、かっこや分数のない方程式の計算 代金などの簡単な方程式の利用
小2	<ul style="list-style-type: none"> 10,000までの数 九九 (2桁の数)±(1桁の数)の暗算 (2桁の数)±(2桁の数)の筆算 簡単な3位数の加減の計算 簡単な分数の計算 	中2	<ul style="list-style-type: none"> 同類項をまとめる 式を足すこと、式を引くこと かっこのついた式の計算 式の値を求める 係数が整数の単項式の乗法、除法 等式の変形 解が整数で、かっこや分数のない連立方程式の計算 代金などの簡単な連立方程式の利用
小3	<ul style="list-style-type: none"> 千万の位までの数 九九を1回適用した除法と、あまりのある除法 (2桁の数)±(2桁の数)の暗算 (3桁の数)±(3桁の数)の筆算 10倍、10でわることによる位の移動と、その処理 分数を数直線上に表し、大小の比較 	中3	<ul style="list-style-type: none"> 分配法則を用いた展開 同類項をまとめる 乗法公式を用いた展開 素数の意味と素因数分解 共通因数を取り出す形の因数分解 和と差の積の形の因数分解 足して○、かけて△の形の因数分解 連続した2数、3数の表し方と奇数・偶数の表し方 平方根の意味とその表し方 $\sqrt{\quad}$の変形 平方根の四則計算 分母の有理化 二次方程式「$x^2=\square$」の解の求め方 $(x-\square)(x-\triangle)=0$の解の求め方
小4	<ul style="list-style-type: none"> 億、兆の位の数 整数の四則計算の定義の理解と活用 小数の計算（小数の乗除、小数×整数、小数÷整数） 分数の計算（同分母分数・真分数・仮分数の加減） 		
小5	<ul style="list-style-type: none"> 整数の性質（約数、倍数、素数） 小数の計算（$\frac{1}{10}$、$\frac{1}{100}$の位の乗除） 分数の計算（異分母分数・真分数・仮分数の加減） 分数の乗除（分数×整数、分数÷整数） 		
小6	<ul style="list-style-type: none"> 分数の約分、通分 分数の乗除（分数×分数、分数÷分数） 小数、分数の四則計算の定義の理解と活用 		

*同校の資料を基に編集部で作成

り、15時間程度の統一単元をつくり上げました。中学校に進学しても、皆、同じ単元を経験していることで、共通の素地が持てるような形にしたいと考えました」（瀧塚指導主事）

◎**小学校と中学校の授業交流**

小学校教師が中学校で、中学校教師が小学校で授業をする試みも定期的に行う。ただ、小学校教師が中学校で授業をすることに少し尻込みをする傾向や、中学校教師が小学校で授業をする際は無意識に「小学校仕様」にしてしまい、本来の中学校の雰囲気は薄れてしまう傾向が課題として見えてきた。

「小学生にとっては、中学校の教師に親しみを感じやすくなる良さはありますが、中学校の体験授業の場になりきれないという課題もあります。より良いバランスを探りたいと思います」（瀧塚指導主事）

◎**小学校卒業時の「確認テスト」**

小学校卒業時には、小学校での学習の総決算として「確認テスト」を行う。出題教科は国語と算数で、10年度は中学校の教師がテストを作成した。「確認テスト」のレベルや設問内容については、今後、小学校と中学校とで更に質を高めていきたいと考えている。

◎**小学生の中学校見学**

小学校と中学校の指導のつながりをつくると共に、子ども自身も中学校をより身近に感じられるよう、小学生が中学生と接する機会を増やした。例えば、4つの小学校の6年生

全員に、中学校の文化祭を見学するように促している。また、小学生が中学校の部活動に体験参加する機会を設けたこともある。

●工夫

小・中学校の教師同士が 日常的につながる機会を設ける

取り組みを進める上では、教師全員が取り組みの意義を理解し、納得することが不可欠だと、石井校長は話す。

「子どもにとって良いことだ」と実感を持ってなければ、先生方には徒労感のみが残ります。教師の入れ替わりもあるため、本校では毎年、年度当初に校長、教頭、教務、校務の四役研修会を行い、プロジェクトの意義や内容を説明しています。それだけでは十分ではないので、プロジェクトの中で子どもの変容を見ながら理解を深めていくのが現状です」

町教委でも、着任研修の機会に一貫教育の取り組みを伝えている。

「『一部の教師だけが取り組むこと』『研究主任がすればよい』という意識では、取り組みは根付きません。日々、子どもと接する担任の先生にこそ小中接続の重要性を理解してほしいのです。誰もが日々の授業づくりで手一杯ですから、『今さら何を加えるのか』と受け取られかねません。先生方に何度も訴えなければなりません」（瀧塚指導主事）

同町の教師の多くは小中どちらかの赴任経

験のみで、小学校教師は中学校教師が直面している課題を実感しにくいのが現実だ。そこで、小中の垣根なく教師同士のつながりを深めるきっかけづくりを大切にしている。

代表的な取り組みは、「若い衆研修会」だ。これは教職歴2～5年の若手教師を対象に小中の教師が集まる勉強会で、月1回、第3木曜日の夕方の勤務時間外に、町教委が支援し、開催している。瀧塚指導主事が他の自治体の先進校を訪問し撮影した授業のビデオを見て検討したり、中学校の体育教師にマット運動の指導をしてもらったり、毎回さまざまなテーマで学ぶ。参加は任意だが、対象者の7～8割に当たる15人ほどが参加している。

「小・中学校の若い先生方が率直に話し合ったり、時には食事をしながら語り合ったりできる関係が築ければよいと思っています。研修会の日には学校を早く出られるように、各校で配慮してくれています。あくまでも自由参加として、例えば、家庭の事情などで出席できない先生の肩身が狭くならないように配慮しています」（瀧塚指導主事）

このような会の素地となっているのは、5校の校長と教育委員会の強固な信頼、協力関係だ。事務局を担う石井校長を中心に、小・中学校の校長と瀧塚指導主事が密に連絡を取り合い、意見や情報を交換している。

「校長にはそれぞれ『このような子どもを育てたい』という思いがあります。小中一貫

の取り組みについて議論する中で、校長同士が心を開き、考えを伝え合える関係になりました。今は例えば、教務主任が他校の教務主任の先生の仕事を見に行き、互いの良さを取り入れる交流も考えています」（石井校長）

教師全員が常に立ち戻れる プロジェクトの原点を冊子化

教育長からの呼び掛けがあった05年度当時は、皆、とても懐疑的だった。約2年掛けて、実態調査なども交えながらプロジェクトの意義を確認し、現在の取り組みを形成してきた。そして今、石井校長は改めて取り組みの意義を見直す時期に來ていると言う。

「年月の経過や、教職員の入替わりに伴い、当初の課題意識や本来の目的があいまいになり、取り組みが表面的になってしまふ恐れがあると思いました。もう一度原点に戻る必要があると考えたのです」

石井校長は、編集委員長を務めていた10年度のプロジェットの研究紀要に、当時の教育長の言葉を掲載することを考えた（図3）。

「05年当時、プロジェクト立ち上げの目的を話された教育長の講演記録が残っていました。その音声を何度も聞き直し、紀要の冒頭7ページにまとめました。誰もがいつでも立ち戻れる、阿久比町にいる全ての教職員が共通して持っているものを作りたいかったです」

更に、石井校長は保護者への働き掛けも必

小中接続——子どもの学びを中学校へつなぐ

図3 プロジェクト立ち上げの趣旨(抜粋)

●正直者、一生懸命努力する子どもが生きる学校にしたい

どの学校、学級にも、授業についていけないにもかかわらず、黙って席に座り、まじめに授業に臨んでいる子どもがいます。この子どもは、これまでのどこかでつまづき、それでもまじめに一生懸命努力を続け、今日まで至っているのです。中学生になってから、これまでの積み残しを取り戻そうといくらがんばっても、なかなか成果は見られません。

阿久比町では、このような正直に一生懸命努力しているにもかかわらず報われない子どもに、真正面からかわっていきたくと考え、幼保小中一貫教育を立ち上げることとしました。

●それぞれの段階で、本当に責任を果たしているかを見極めなければ…

幼稚園や保育園に入園するまでの家庭の責任、幼保小中がかかわる教員や保育者の責任、それぞれの立場や段階でその責任は違います。その時期に身に付けるべきことが確実に身に付いているかどうかを見極める必要があります。(中略)

阿久比町幼保小中一貫教育では、各年齢に応じた「欠落なき教育」の実現をめざすこととしました。

●幼保、小、中の間に見えない壁がある。これを打ち破らなければ…

子どもは、年齢が上がるにつれて判断力が高まります。しかし、学校でのきまり・規則は、小学校で緩く、中学校で厳しいのが一般的です。逆ではないでしょうか。

阿久比町幼保小中一貫教育では、幼稚園や保育園、小学校、中学校の間のずれや逆転のない「段差なき教育」を進めたいと考えました。

●1町1中学校という利点を生かしたい

中学1年生のスタート時点で、子どもの力がまちまちでは、中学校での指導の効果を上げることはできません。(中略)

阿久比町幼保小中一貫教育では、幼稚園や保育園間、小学校間、さらに学級間で「落差なき教育」が進められることが大切であると考えました。

*第2回阿久比町幼保小中一貫教育実践発表会紀要「2010プロジェクト in 阿久比」より一部抜粋

石井校長が重視する

校長としての役割

「幼保小中一貫教育プロジェクト」を浸透させるために、決定事項として、先生方に具体的なお願いをすることもあります。新たな取り組みを始める時には、ある時期、校長としてこのようにリーダーシップを発揮することも必要だと考えます。

しかし、それだけでは取り組みは継続されません。日常的に、取り組みの意義を先生方に伝え、対話することを心掛けています。一人ひとりの先生方とコミュニケーションを取りながら、学校全体でより良い取り組みをつくっていきたくと思います。

要だと話す。

「保護者へのアンケートでは、『幼保小中一貫教育で何をやっているのか分からない』という声が寄せられています。まず先生方が同じ意識を持ち、取り組みを進めていけば、保護者の目に映る子どもの姿が変わっていくはずです。それが、保護者の理解・支援につながり、町全体に定着していくと思うのです」

●成果・今後に向けて

中1の不登校が激減 家庭学習へ取り組みを広げる

プロジェクトを始めて、中学1年生の不登校が激減した。かつては10人以上だったのが、現在は1〜2人にまで減ったという。

「教師も子どもも少しずつ意識が変わってきていると思います。小中の教師が互いの授業を見合う機会が増え、例えば、6年生の学級担任が中学校について話す機会が増えるなど、中学校を意識した指導がなされつつあります。また、小学生が中学校の文化祭を見に行ったり、部活動で交流したりと、中学生の姿が見えやすくなったのも影響しているでしょう」(石井校長)

ただ、中学1年生の不登校は減ったものの、中学2年生になると以前と同じくらいの数の生徒が不登校になるといいます。

生徒が不登校になるといいます。

「私たちは、以前とつまづきの原因が変わってきているのではないかと捉えています。小中接続を原因とする問題は解消したけれども、中学校生活が進むにつれて学力不振と人間関係に関する問題が大きくなってきます。この2つについては、今後、更に取り組みを進めていきたいと考えます」(瀧塚指導主事)

今後について、石井校長は次のように話す。「なぜ小中一貫に取り組みのかという原点を大切にした上で、新たに家庭学習の分野に着手したり、これまでの課題を改善したりしながら実践を深めていきたいと思えます」